

「日中不再戦・平和と友好のつどい」に寄せて

長谷川暁子

皆さん、今日は。長谷川暁子でございます。お忙しい中、お越しいただき誠に有難うございます、この集いを主催して下さいの日中友好協会の皆さん、今日のために一生懸命に準備実行して下さい、演出・監督・出演者の皆さん、本当にありがとうございます。

感謝の意味をこめ、自分の拙い日本語、そのコンプレックスを克服して、胸中を打ち明けたいと存じます。どうかよろしくお願いいたします。

祖国中国からもうひとつの祖国日本へ

私は中国で生まれ、中国人としてそこで40年も暮らして参りました。自分を大事に育ててくれた中国を祖国として愛しております。

四十路にさしかかったとき、身体の中に日本人の血が流れているせいか、幼い頃から憧れていた未知の日本に留学に参りました。そしてこの国が好きになりました、留学を終え一旦帰国しましたが、その後の2年間、祖国である中国を後にしていいのか、初老になった自分がこれまでの安定した生活を捨てて、言葉もわからず、生計を立てるすべも知らず、想像しうる貧乏生活に耐えられるのかどうかと悩んだあげく、日本で人生の後半を送ろうと決意しました。

以来、27年が過ぎました。日本での生活は案外楽しいものでした。ささやかな仕事をしながら、質素に暮らしながらも、自在自適で居心地はよかったです。それに何よりも、多くの方々からご親切とご好意をいただき、やはり心細かった私にとって、かけがえのない励ましと慰めとなりました。

愛する国日本

私の望みがかなえられたと申しますのは、日本が私にとって住みやすい国であるからです。清潔で便利で、個人の意思が尊重され、国民が社会秩序、ルールを大切にす、マナーが大切にされる。これは大変気に入っております、こういう日本が好きなのです。

もちろん日本はいろんな面で、少なくともアジア諸国と比べればかなり進んだ立派な国でございます。でも私にとっては、何と云っても、日本人の優れたマナー、親切心、私に示されたような好意ほど得難いものはありません。日本での歳月を振り返るたびに、自分の選択は正解だった、もうひとつの祖国日本で日本人として人生の後半を送ることができたのは幸いだったのだ、とつくづく思います。

ただひとつの陰り 日中関係への思い

しかし、たとえどんなに楽しい時にも、いくら幸いだっただとしても、幼い頃からずっと自分の中に存在しているひとつの暗い陰りを、その楽しさをもって拭い去ってしまうことも、その幸福感をもってその陰りを追い払ってしまうこともできませんでした。その陰りとは日中関係でございます。毎年夏になると、いわゆる「戦後処理問題」、「歴史教科書問題」、「靖国神社公式参拝」、さらには「領海権問題」などが、恒例行事のようになりかえされます。

最初の頃は、日本でのできごとや問題の処理に違和感を持ちつつ、「まあ、近隣関係とはこういうものか」という程度の認識にとどまり、それほど深刻には考えませんでした。お祭りの花火と同じで、やがて夏が去って、私の中のその違和感さえ消え去り、静かな生活は戻って参ります。

しかし、2012年暮れに安倍第2次政権が発足して以来、新聞、雑誌、テレビなどで、「(中国)批判」、「(中国)指摘」、「(中国)暴露」の文字が飛び交う記事と番組が盛んに取り上げられるようになりました。その中では、露骨な軽蔑と嘲弄とが頻りに繰り返されました。教養も見識も高いはずのジャーナリストやコメンテーターまでもが、日本より数十年も遅れている近隣の貧しさ、欠陥を冷たい目線で見るという風潮に呆れながらも、私は寂しくて悲しくてたまりませんでした。

中国を仮想敵とする安倍政権の戦略

この2年半の間、安倍総理は慌ただしく諸国を歴訪し、アジア諸国訪問、バンドン会議およびアメリカ議会とG7首脳会議で発言した内容は、ほとんど中国を「仮想敵」視するという趣旨に基づくものと言って過言ではありません。テレビ報道風の言葉で申しますと、その趣旨は「中国牽制」、「中国包囲」、「中国対策」という戦略にある、ということでございます。

ひょっとしたら、私がやはり中国人だから過剰に日本のことを考えているのかも、混乱したこともあります。しかし、どう考えても日本の現政権は日本を平和から離れる方向に引っばろうとしている、どう考えても安倍総理は日本を戦争する国に変えようと腐心している。私にはそうとしか見えません。今の暴走を阻止しなければ、日本は再び平和から遠ざかってしまうという心配と懸念を、私はひとりの人間として抱かずにはおれません。

日本の為政者たちはくどくどと「国民の命と財産を守るために」と言って憚ることがありません。「国民の命と財産を守る」のなら、なぜ「人の命と財産を奪う以外の何ものでもない」戦争を起こす政策を執拗に追いつけるのでしょうか。戦後日本は敗戦の恥辱をしのぎ、再び愚かな戦争をしないと決意し、そしてその決意を憲法に刻みました。それにもかかわらず、なぜ国民の意に反して、

その平和条項を憲法から取り除こうとするのでしょうか。仮にその仮想された危険と脅威が存在する場合があったとしても、刺激したり、挑発したり、周辺危機を煽ったりすることが、果たしてその危険を避け、脅威を取り除き、日本の平和を守ることのできる賢明な国策だと言えるのでしょうか。

平和への尽力と国際的支援こそ抑止力

戦争は台風や地震と違い、作られるものです。70年前のあの戦争は当時の為政者たちが作ったものです。そして、あの人たちは国民の命と財産を守ってはいませんでした。兵隊たち、開拓団の人々、沖縄県民、そして本土の民、300万人も死んでいきました。幸運にも生き残れた人々もすべての財産を失いました、あの戦争を起こした人たちが実際に守りぬいたのは、おそらく自分の命と財産だけだったことでしょう。

70年前、死と破滅の淵にまで追いこまれた日本の国民を救ったのは平和でございました。その後の復興、発展と繁栄を守ってくれたのは平和憲法でございます。この憲法こそ賢明な国策であり、強力な武器です。それを遵守し続けることは、世界が守ってくれることに繋がる、私はそう思います。現在では国際世論と国際的な支援は誰であろうと無視できない最強の抑止力だと、私はそう確信いたします。

歪んだ歴史認識がもたらすもの

ではなぜこれほど明確な道理が国の頂上に立っている大物たちには通じないのでしょうか。なぜ国会という厳粛な場で、「やるか、やられるか」などという「戦争狂」じみた恐ろしいセリフが繰り返されるのでしょうか。私は、その根本的な原因は、あの戦争に対する異常な程に歪んだ認識にあると思います。相当な年月を経てなお、3000万もの犠牲者を作り出した罪を未だに認めたくない。「侵略の定義は定まっていない」などという非常識な言葉を口にしてまであの戦争の悪質さを否定しようとする。靖国神社を公式参拝した閣僚たちは、口々に「私は誰の心を傷つけるつもりもない」などと傲慢な態度で、閣僚となったという権威を誇示しようとしているのです。自分の父母、兄弟を殺され、自分の祖国が蹂躪された人々にとっては、そのような行為、そのような態度は到底容認できない挑発であり、その傲慢さはまさに侮辱として被害者の心を深く傷つけています。その傷がいかに深く、むごいものかは、人の心の苦しみが分からない人たちの「つもり」で判断できるものでは到底ございません。

安倍さんの「隣国と仲良く」、「美しい日本」とは

安倍総理はときどき「隣国と仲よくつきあいましょう」と言っています。私

もときには愚かな期待をしました、しかし彼の総理としての一連の発言からは過去の過ちを正視する誠意はみじんも感じられませんでした。戦争中、あれほどひどい侮辱を蒙った、いわゆる「慰安婦」の方々に対する心ある思いやりと人間らしい同情のひとかけらも、残念ながら見つけることができません。むしろ、自己顕示、傲慢さ、そしてアメリカに媚びようとする内心の方がみごとに現われておりました。

安倍さんは 2009 年夏、第 1 次政権に就いた後、「美しい国をつくりましょう」と国民によびかけました。日本は立派な国で自然にも恵まれています。しかし昔日、自らの過ちで汚れてしまいました。戦後国民はその汚れを洗浄するために懸命にがんばりました。自国の繁栄のためだけでなく、中国とアジア諸国にも多大の援助をいたしました。

安倍総理 戦後 70 周年の節目 汚点洗浄の最大のチャンスです

戦後 70 周年という節目にあるまさに今年、汚点洗浄の最良のチャンスを逃さないために、私も一介の国民として、いいえ半介かもしれませんね、安倍総理大臣に進言したいと存じます。

「安倍総理殿」、本当に国のためと思われるのなら、1985 年 8 月のワイツゼッカー・ドイツ元大統領のように、真摯な態度で世界の人々に対して、過去の教訓を受け入れる誠意を表してほしいのです。本当に国民のためというのなら、ご自分の係累、ご自分の先輩たちが冒した罪を正直に認めてほしいのです。私の知る限りの中国の人々、きっと他の被害国の人々も同じでしょう、彼らが日本に求めているのは、いつまでも頭を垂れ、跪くというような謝罪ではありません。陰湿な歴史否定行為を 2 度と繰り返すことなく、そして毎年記念すべき日を迎えた慰霊祭で、日本人の犠牲者だけではなく、あの戦争に尊い命を奪われたすべての人々のために、哀悼の意を表してほしいのです。そうして、70 年も続いてきた近隣との歴史問題をめぐるもめごとといざこざに総理大臣の手で終止符を打ってほしいのでございます。

皆さん、国と国の間では摩擦とトラブルは起こりうるものです。でも我々現在の人々が後世に残すべきものは、恨みや偏見ではなく、憎悪と敵視でもなく、過去の教訓と平和の理念であるという認識を共有しさえすれば、寛容、共存、協和という関係を築くことができます。それによって摩擦などを解決する良法を見いだすこともできるでしょう。その時、日本は、わが国は、必ずや世界に認められる真に美しい国になると信じ、そして心からそう願っております。

(2015 年 7 月 1 日、大阪天満橋・ドーンセンターにて)